日本のデザイン

私の履歴書

司憲 庵久栄 ㉑

「日本にもデザインあり」という存在証明を世界に示す時がきた。昭和三十年代半ば、坂倉準三さんをはじめ建築界の人が中心になり、インダストリアル・デザイン分野も巻き込んで、ワールド・デザイン・コンファレンス（WODeCo、世界デザイン会議）を日本で開催しようとの機運が急浮上した。

その背景には、世界から日本の「模倣」に対する強い非難があった。昭和三十二年（一九五七年）九月、藤山愛一郎外相が英国を訪問した際、英テレビとの会見で、英国製と日本製のボールベアリングを見せられ、どちらが日本製か聞かれた。大臣は無礼な質問として答えなかったが、それほど工業デザインの盗用が大問題になっていた。これはまずいと翌年、通産省にデザイン課が設置された。

「模倣」に反発 存在証明

建築との融合、考察深める

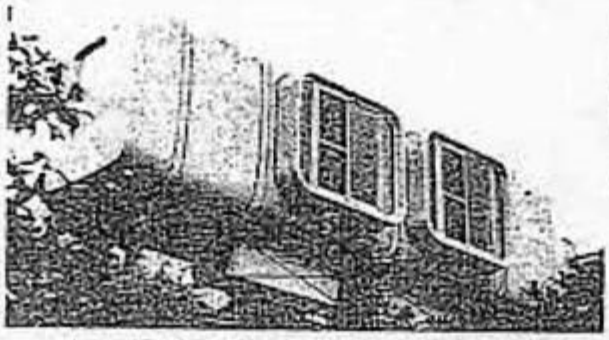
建築界の盛り上がりに対して、日本インダストリアルデザイナー協会（JIDA）の小杉二郎理事長は、「日本はまだこれからだというのに、高い金を使って世界会議はやれない」と大反対した。

JIDAの会員であった私は、理事会に乗り込んで「我々は世界に門戸を開くべきだ」と反論したが、協会の方針は変わらない。そこで、個々の立場で参加したらどうかということで了承を得た。

私は留学中に米国の組織なども見ていたので、日本の組織が古く、底が浅いと感じていた。隠れた会員がもっといるはずだ。それなら私が日本のインダストリアル・デザイン界の仲間を集め、糾合を図ろうと呼び掛けを始めた。

安保論争真っ盛りの昭和三十五年五月、世界デザイン会議が東京で開かれた。テーマは「今世紀の全体像―デザイナーは人類の未来社会に何を寄与しうるか」で、参加者は外国から約八十人、日本は約百数十人。日本商工会議所が中心に動いてくれた。

私は哲学部門のシンポジウムのパネリストを頼まれた。取り上げたテーマが「破壊と構築」。生物界のダイナミックな進化の理論を建築・都市に志向したメタボリズム（新陳代謝論）を下敷きにして、例えを自動車にとった。自動車は都市を破壊するが、また新しく構築するというシナリオを説明した。



メタボリズムの理論を応用したカプセル「ヤドカリ」（1969年）

メタボリズムについては評論家の川添登をはじめ、建築家の菊竹清訓、黒川紀章らが多くの研究を発表している。

私にとってインダストリアル・デザイン自体がメタボリックだったから、やっていくうちにインダストリアル・デザインで建築・都市を考えることが一つの目標になった。

要するにインダストリアル・デザインは空間を道具化してしまう。こうした発想に基づき、小住宅の台所、風呂、トイレなど水回りを一つに固めたユニットを考え、GKコアと呼んだ。カプセルロッジなどの開発で具体化した。

「住居研究―道具論」が評価され、三十九年には米国のカウフマン財団から名誉ある研究賞を受賞した。国際的にも初めての賞、しかも八千ドルの賞金までついていた。

三十七年、私は三十二歳でJIDAの理事に選出された。私への期待票である。これに対し、"政敵"である小杉さんはJIDAの表舞台から潔く身を引いた。侍感覚であった。しかし、それを機にJIDAの国際会議に向けた体制作りが本格的に始まった。

（インダストリアル・デザイナー）